

## 『ギリシア・ローマ神話』と 現代 (3) クレタ島にまつわる種々の 伝説

経営学部  
山田 晶子

クレタ島 (Crete) は、ギリシア (公式名ギリシア共和国 Hellenic Republic) に属する島で、面積は約8300平方キロメートルである。地中海に浮かぶ美しい島であり、紀元前2000年頃に栄えたクレタ文明 (Crete Civilization、ミノア文明とも言う) の遺跡が今も残っている。代表的な遺跡はクノッソス宮殿 (Knossos Palace) である。さて、このクレタ島には、ギリシア・ローマ神話と関連する多くの伝説が残っている。今回はこれらの伝説について書こうと思う。

### 【ゼウスとエウローペー】

ゼウス (Zeus, ラテン名から来た英語名ジュピター Jupiter) はギリシア神話の神々の王であるが、正妻ヘラ (Hera, ラテン名から来た英語名ジュノー Juno) がいるにもかかわらず多くの女神や人間の女性や妖精 (ニンフと呼ばれる) と恋をした。その恋人の一人がエウローペー (Europa, ラテン名エウロパ Europa。ギリシア名と同じ綴り字) である。彼女はシリア (一説にはフェニキア) のチュロスの美しい王女であったが、ゼウスは彼女に恋をしたために策略を弄して白い美しい牡牛に姿を変えて、牧場で花を摘んでいた彼女に近づいた。そしてそれを本物の牛だと思ったエウローペーは、牛があまりに美しかったためにそれに近寄ったとき、あっという間に牛は彼女を背中に乗せて風のごとく去って行った。彼女はゼウスに誘拐されたのであった。牛がどこへ行ったかといえば、地中

海を渡ってクレタ島へ行ったのである。クレタ島でゼウスは神の姿に戻り、エウローペーとの間に息子ミノス (Minos) をもうけた。エウローペーはクレタ島の最初の妃となったのであった。ゼウスはエウローペーを連れ去ったときに、今のヨーロッパ (Europe) をあちらこちらへとさまよったために、そこはエウローペーの名前が起源となってヨーロッパと呼ばれるようになったと言われている。

また、木星 (英語でジュピター Jupiter と呼ばれるが、これはゼウスのことである) の衛星の一つにエウロパがあるが、これもエウローペーのラテン名がつけられたものである。このほか木星の衛星には、ギリシア神話に登場する国や女性たちや男性たちの名前がつけられている。テーベ、イオ、ガニメデ、カリスト、パシファエ等がそうである。

### 【ミノタウロスとダイダロス】

クレタ島の文明であるミノア文明が栄えたのは、ミノス王の時であった。ミノス王は、ゼウスとエウローペーの長男であった。彼には悲劇がまわりついてる。というのは、彼は海神ポセイドン (Poseidon, ラテン名から来た英語名ネプチューン Neptune) から美しい牡牛を贈られたが、それは後にまた海神にいけにえとして返す約束になっていた。しかしこの約束をミノス王が破ったことが悲劇の始まりであった。もっと言えば、ゼウスがそもそもエウローペーを誘拐したことが間違っていたのである。さて、ポセイドンが贈った牡牛は余りにも美しく、ミノス王は返すのが惜しくなり偽の牛を返したのであった。しかし神をだますことはできないことであった。怒ったポセイドンは、恐ろしい復讐をしたのである。それはどんなことかと言えば、ミノス王の妃であるパシファエ (Pasiphaë) が、この牡牛に恋をするように仕向けたのである。人間と牛との恋! ギリシア・ローマ神話にはこんなにも様々な恋の形があるのである。しかし人間と野獣との恋物語は世界中に存在しているのではないだろうか。日本でも、伏姫に

恋をした八房という犬の物語があり、両者の間に八人の男児が生まれた（滝沢馬琴著『南総里見八犬伝』）。

常識的には、人間と動物の恋は人道を外れたことであった。パシファエは、神に掛けられた呪いを打ち破ることは出来ず、哀れにも、ダイダロス (Daedalus) という絶世の名工匠に本物の牝牛に似た木の牛をこしらえさせてその中に入り込み、自分が恋をした牝牛と交わりそのため恐ろしい化け物が生まれた。これが、体は男性であるが頭から上は牛という怪物のミノタウロス (Minotaur) であった。ミノス王は、この怪物を世間から隠すために、名工匠ダイダロスに命じてラビリントス (Labyrinthos) と呼ばれる迷宮を作らせ、その中に怪物を閉じ込めた。英語のラビリンス (labyrinth) は「迷宮、迷路」の意味であり、この語源はギリシア語のラビリントスである。また英語の daedal は形容詞で「複雑に入り組んだ、迷路のような」の意味であり、ラビリントスを創ったダイダロスの名前が語源になっている。

さて、ダイダロスはアテネの生まれであったが、殺人罪を犯したために罰を受けてアテネを追放されてクレタ島に来ていたのであった。彼の息子がイカロス (Icarus) である。しかしクレタ島でも、ダイダロスはミノス王に逆らったために息子と一緒にラビリントスに閉じ込められてしまった。彼がミノス王を怒らせたのは、ミノタウロスを殺しにきたアテネの英雄テーセウス (Theseus) を助けようとする、ミノス王の娘である王女アリアドネ (Ariadne) に糸玉の知恵を授けて彼女とテーセウスを手助けしたからであった。アリアドネのおかげでテーセウスはミノタウロスを殺すことができた。今日、「アリアドネの糸」という言葉は、混乱や紛糾を解きほぐす手引きの意味で用いられている。

ダイダロスは、何とかして迷宮から脱出しようと考え、その結果空を飛んで逃げることを思いついた。それは鳥の羽を集めて大きな翼を作り、ロウでそれを背中にくっつけて空を飛ぶという方法であった。彼は息子のイカロスにも同じ翼を作っ

てやった。そして空を飛ぶときに太陽の熱でロウが溶けて翼が取れないように、あまり太陽に近づいてはいけないと息子に教えておいた。しかし、親子と一緒に飛び立ったとき、息子のイカロスはずっと高く飛びたいと思って上へ上へと昇っていったために、ロウが溶けて翼が離れ、彼は地中海に落ちて死んでしまった。この伝説に基づいて、天文学では太陽に最も近づく小惑星はイカロスと呼ばれている。また、イカロスの死体が流れ着いた島は、現在イカリア島と呼ばれている。現在、クレタ島にはラビリントスの廃墟が残っている。

また、20世紀の偉大な小説家であるアイルランド人ジェームズ・ジョイス (James Joyce 1882 - 1941) はその小説『若い芸術家の肖像』 (*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916) の主人公の名前を、ダイダロスから取ってスティーヴン・ディーダラス (ダイダロスの英語名読み) と名づけている。ジョイスは、自分の分身である主人公スティーヴンが、ダイダロスのように閉じられた世界 (アイルランド) から飛び立って世界的な芸術家として成功することを願っていたが、「意識の流れ」 (stream of consciousness) という手法を英文学史上初めて用いたこの小説は見事に成功して、ジョイスは世界的な作家となったのである。彼の代表作は『ユリシーズ』 (*Ulysses*, 1922) と『フィンネガンズ・ウエイク』 (*Finnegans Wake*, 1939) である。

以上に述べてきたように、クレタ島にはギリシア・ローマ神話に出てくる神や人間が多く関わっているものであり、彼らは現代に至るまで世界に大きな影響を与えてきているのである。